

TERRY CATH PLAING

written by HADEYA sp tahnx to FLEA and ANTHONY

1

なあ———デ・ニームは煽った。煽り続ける。

「お前ら、俺には出来ないって思ってただろう？ ただの老いぼれた、って嘗めて嫌がる」

「能書きはいいから早くやれよ」

「ああ———」

———やるさ、こんなのは朝飯前なんだよ。

小口径のリボルバーを手に取った。銃口を自らのコメカミに宛がう。賭けが始まる。ギャラリーが興奮と熱狂に包まれる。

「静かに！」

審判が声を荒げた。喧噪が嘘のような静寂に変わる。ロシアン・ルーレットの会場は異様な熱気に包まれている。

期待に応えない訳には行かない。

この拳銃には5発の銃弾が装填されている。生存確率は、12.5パーセント。

.....俺は経験上、知っている。ビビったら負けだ。小便をチビる前にトリガーを引くんだ。

けど、そんなのはガキの遊び。答えは、楽しむ事。命懸けのスリルを楽しむ事。

楽しませろよ。もっともっと楽しませろ。

トリガーに指を添えた。あとは数センチ、人差し指を引くだけ。ギャラリーは笑っている。ニヤニヤ、ヘラヘラ笑っている。

楽しませろよ、もっともっと楽しませろ。死のリスクを俺に味わせろ。

黒い鮫が心の海を泳ぐ。邪な感情も興奮気味だ。

誰も彼もが死を望んでいる。退屈はさせねえよ。期待に応えてやる。

デニームはピストルを審判に向け、トリガーを引いた。真っ赤な血と脳漿が飛び散る。予測していたのだろう。ギャラリーが一斉に数センチ、トリガーを引き.....

俺を目掛けて銃弾が飛んで来る。至近距離から飛んで来る。俺には分かる。この後の展開が。それは、こんな感じさ。

「うあああああっ！」

金切り声を上げた。心の奥底の叫び———銃声を掻き消す。銃弾は木っ端微塵に粉碎され、のみならず連中のド頭を吹っ飛ばした。返り血と脳漿が俺の顔を真っ赤に染める。

どうだ、期待に応じてやったぜ。

いいか、お前ら。〈気〉を甘く見るな。無駄な気合いがお前らには欠けてる。著しく欠けている。
楽しむんだよ、人生を。人生にお馴染みのリスクを楽しむんだよ。

楽しめよ。もっともっと楽しめ———デ・ニームは告げた。足元に転がる死体に向け。

デ・ニームは付近に置かれた最高級のタバコを口にし、ジェットライターで火を点けた。
その未知のテイスト、そして余韻……。 (了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872